

明治大学人文科学研究所紀要 第63冊 (2008年3月31日) 101—118

剣道の発達過程に関する研究 —槍術との関係再考—

長 尾 進

— *Abstract* —

Study of the Influence of Spearmanship on the Development of Kendo (the Japanese Art of Fencing)

NAGAO Susumu

This study aims to clarify the influence of spearmanship on swordsmanship (Kendo, or the Japanese art of fencing) in its development, focusing on the development and improvement of its skills and equipment.

We call bowmanship, horsemanship, swordsmanship and spearmanship “shi-gei” (“the four arts”). Of these, spearmanship was the highest acclaimed skill on the battlefield as the phrase “ichi-ban-yari” (“the first spear”) indicates. It was considered a matter of honour for warriors to excel at spearmanship, and they placed importance on developing their spearmanship together with swordsmanship—even in later days when times were peaceful.

An increasing number of clans in the late Edo period, encouraged warriors to train and engage in sparring matches wearing protective equipment so that they could attack each other without holding back so as to improve their skills, both in spearmanship and swordsmanship. This trend was backed by the idea that amid the growingly turbulent times caused by the arrival of foreign ships, only warriors who trained their minds and bodies using this training method could be considered dependable in the event of an emergency. Many clan schools of those days did not offer simultaneous training in spearmanship and swordsmanship that would enable warriors to receive training in several martial arts—including spearmanship and swordsmanship—so as to be listed and licensed.

Against a background that spearmanship was promoted hand-in-hand with swordsmanship, the theory that swordsmanship was preceded by spearmanship has been supported, as Ushio Shimokawa related in his book “Kendo no Hattatsu” (“The Development of Kendo”) (1925). On the development of swordsmanship skills and equipment, including the bamboo training sword and training armor, his book says “Judging from the nature of skills and exercise safety between swordsmanship, which features cutting, and spearmanship, which features thrusting, what was invented in spearmanship was applied to swordsmanship.”

One developmental impact of note occurred during the Tempō Period (1830-1844), when Susumu Oishi, a warrior of the Yanagawa clan in Chikugo, brought about a great revolution in the equipment and techniques of swordsmanship. He took dojo (training halls) in Edo by storm with the help of a particularly heavy and long (160centimetres) sword, and by fighting left-handed—something that had never been done in swordsmanship before. It was presumed that his swordsmanship was greatly influenced by spearmanship because he served the Yanagawa

clan as the grandmaster of spearmanship.

As described in the above examples, it is hard to overlook the influence of spearmanship on the development of swordsmanship.

However, examining the development of the training bouts of spearmanship in detail, we can find that some areas were not necessarily affected by spearmanship. At the same time, advocating that swordsmanship was preceded by spearmanship seems to have been presented as an assumption without a detailed analysis of the development of spearmanship being made.

In this paper, we organise and analyse the development of equipment, training and practice bouts in spearmanship and review the influence of spearmanship on the development of swordsmanship. The following three points summarize our analysis and review.

1. The face guard and bamboo armour used in spear and naginata (halberd) training as depicted in paintings of the late 1600s are often assumed to have influenced the practice armour worn in swordsmanship. However, it is a hasty conclusion to say these paintings prove that spearmanship introduced the full-contact practise matches that asked participants to attack each other wearing protective equipment such as face guards, because the paintings in question showed the exercise known as *irimi*, which is a physical motion in which one makes the best use of an opponent's move. In an *irimi* exercise, the training partner with a spear does not wear any protection, while the training partner, armed with a sword, halberd or short spear, does. This form of exercise can be found even in the late Edo period age.
2. It was in the last years of the 1700s that full-contact kenjutsu training bouts in which both participants wore protective equipment became widespread. Because the Jikisinkage school developed in the 1710s a method of training in which students of swordsmanship fought freely wearing protective equipment, it is clear that spearmanship introduced full-contact training matches not before, but after swordsmanship did.
3. Although the swordsmanship of Susumu Oishi was influenced by spearmanship, his skills and long bamboo sword were not the products of the influence of spearmanship, but products realized by his own, unusually gigantic, physical dimensions and left-handedness.

Both swordsmanship and spearmanship have a history of being promoted as warrior skills. In this sense, the development of protective equipment for these two arts was mutually related. In terms of skills, however, it is advisable to think that both swordsmanship and spearmanship advanced and improved independently of each other.

〈個人研究第2種〉

剣道の発達過程に関する研究

—槍術との関係再考—

長 尾 進

I はじめに

本研究は、「剣道」（剣術時代を含む）の発達過程について、特にその技術・道具の開発・改良に影響を与えたとされる「槍術」との関係に焦点をしぼり、明らかにすることを目的としている。

剣術技術や道具（竹刀や防具）の発達と槍術との関係については、下川潮が『剣道の発達』（1925）で、近世初期までは剣・槍二術は不分離で、面や胴の発明は、稽古上の安全性から考えても槍術において発明されたものを剣術に応用したものであろう、と述べたのをはじめとして、「槍術の影響」説が長い間支持されてきた。とくに天保期（1830～1844）に筑後柳河藩士の大石進が、五尺三寸（約160cm）という長大な竹刀と、左片手突きというそれまでの剣術にあまり使われなかった道具・技術を用いて江戸中の道場を席捲したことによって、剣術の道具・技術に一大革命がもたらされたとされ、大石が柳河藩の槍術師範も兼ねたことがあるため、彼の剣術には槍術の影響が強いのではないかと、とも推論されてきた。しかしながら、槍術の稽古・試合形態の発達過程を丹念にみると、剣術の技術・道具は槍術から影響を受けた、とは必ずしもいいきれない部分がある。

そこで本稿では、槍術における稽古・試合の発達過程を時系列に整理・分析し直し、そのうえで剣術の発達過程における槍術の影響を再検証することを目的とする。ただし、剣・槍両術の道具（防具）の発達過程についての考察は、中村民雄氏の近著『今、なぜ武道か—文化と伝統を問う—』（財団法人日本武道館、2007）に詳しいので、本稿では両術の稽古・試合形態の発達過程についての考察が中心となることを断っておきたい。また、弘化期（1844～48）頃までには現代剣道とほぼ近い剣術の技術・道具は出来上がっており、かつ明治期以降槍術が急激に衰退したことから、本稿では考察の対象を幕末期までとする。

なお、「槍」および「槍術」の表記についてであるが、近世中期までの文書類においては「鎗」または「鎗」と表記されることが多く、「槍」はむしろ少ない。「鎗」は国字であり、また、「鎗」は本来字義的には「鼎」や「器」を意味するものであることなどから、近世後期以降は、もともと刺突用の武器を意味する「槍」「槍術」が使われることが多くなった¹⁾。本稿でもこれにしたがひ、引用部分以外は、「槍」および「槍術」に統一して稿を進める。

Ⅱ 剣・槍二術の関係

剣術の発達過程における槍術の影響については、前出・下川以外にもいくつかの著作・論考においてこれまでに論じられてきた。富永堅吾は『剣道五百年史』のなかで、『武術流祖録』の記述などから、室町期に勃興した神道流、新当流、中條流、富田流、新陰流などの剣術祖流の流祖たちは、その多くが剣・槍両術に優れていたこと（あるいは、剣・槍を含めそれ以外の武術も兼ね備えていた）ことを指摘している²⁾。これら流祖たちがその武術を創始したのは戦国期においてであり、実戦上に有効性のある総合武術的なものであった。

剣術・槍術は、弓術・馬術とともに「四芸」とよばれ、なかでも槍は「一番槍」という表現にみられるように中世後期には武功の第一として数えられるようになり、近世に入っても、武士が外出するときには供に槍を持たせるなど武門の象徴として捉えられ、剣・槍ともに修練しておくことが武士たるものの務めとされた。

近世中期になると、荻生徂徠が『鈴録』巻十一「比較」(1727)において「今時武芸は、武家に何れも稽古する事なれども、戦国^{ようやく}漸^{ひこく}遠のき治平年久しきゆへ、芸の師をする人、皆武芸は戦場に用るものと云事を忘れて、己が斗筭(としょう)の禄を得る計とす。—中略—。道理の高妙を談じ、或は立廻り、所作の見事なるを専らとし」と述べる³⁾ように、長く続く泰平のなかで弓・馬・剣・槍など各武術は戦場の「古法」を失い、型の所作の見事さを競うような、いわゆる「華法」といわれるように形骸化し、またその総合武術的性格は薄れ、剣術家・槍術家などとよばれるように各武術の専門化がはじまり、さらに槍術のなかにおいても槍の種類(素槍^{すやり}、鍵槍^{かぎやり}、十文字槍^{じゅうもんじやり}、管槍^{くだやり})による専門化が進んだ。

一方、このように武術が華法化・専門化して行くなかで、剣術では1600年代半ば頃から面や小手などの道具(防具)を部分的に着けて稽古を行う流派が現れていたが、直心影流では1710年代頃までにはそれらの道具を改良し、「面・手袋・小具足」を着けて袋しないで遠慮なく打合う「吟味乱レ之事」という自由乱打形式の稽古法を編み出した⁴⁾。また、一刀流中西派でも、宝暦年間(1751～1764)の中頃に「面・小手・シナヘヲ用意シテ」の打ち込み稽古を開始した⁵⁾。これらはいずれも、剣術における実用性(古法)の回復をめざしたものであった。

前出・下川潮はその著『剣道の発達』中の「教習法の変遷」において、

足利の末期より徳川の初期に至るまでは、剣・槍の二術は全く分離せず所謂刀槍術と云ふ一つの術として修行せられしものなるが故に、二術共に此等の防具を使用せしならんも、元來其發明使用のありしは剣道よりは主として槍術修行の上にあるしものにて、二術が漸次分立専門となるや益々槍術の方に於て此防具の改良發達の著しきものありしなるべし。換言すれば面胴の如き防具の發明は、槍術稽古の初めて産出したるものにして、剣道修行に使用するに至りしは寧これに倣ひしものにはあらずやと考ふるものなり。何となれば、斬撃を主とする剣術と刺突を主とする槍術との業其ものの性質を考ふるときは、其稽古修行上孰れが危険にして孰れが防具を必要とするか容易にこれを知ることを得べければなり。現に明和五年に出でたる柏淵有儀の『芸術武功論』に竹鎧・鉄護面・綿護腰を図示し其用法を示す。其製、現今の剣道道具に類似す

れども之を剣法の練習に用ふるに言及せず。槍に対して誤傷を防がん為に之を用ふるを説くが如きは殊に注意すべきことなりとす。長沼・中西二氏の如きは此等のものに更に自ら工夫改良して自流に採用したるものならむ。

と述べ⁶⁾、①剣・槍二術が創生期においては不分離であったこと、②刺突を主とする槍術の方がより防具（面・胴）の必要性があり、剣道がこれに倣ったと思われること、③ただし、単なる槍術防具の流用ではなく、槍術防具を参考に直心影流（長沼）や中西派一刀流（中西）において剣道独自の道具が工夫されたこと、の3点を推論している。

図1の菱川師宣筆『千代の友鶴』（1682）にみられる薙刀を持った中小姓の着用する面と腹巻の図や、図2の（上記の文中で下川が紹介している）柏淵有儀『芸術武功論』（1768）中の竹鎧・鉄護面・綿護腰の図などは、前出下川・富永・島田氏・中村氏の著作をはじめ諸書に図入りまたは文章にてよく引用され、剣術道具はこれらを参考に作成されたのではないかと推考されることが多い。

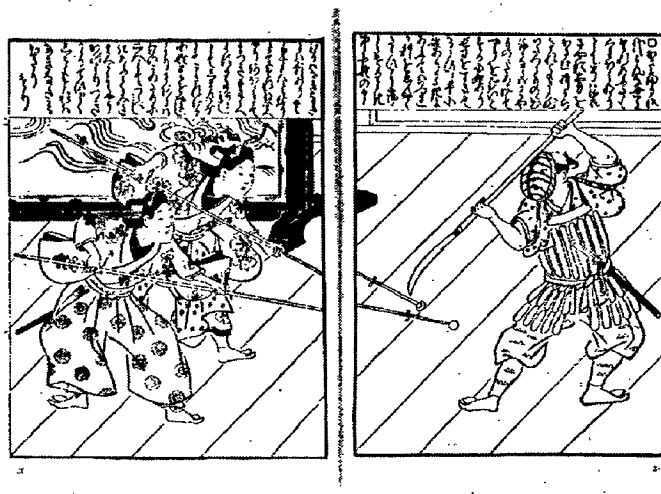


図1 菱川師宣筆『千代の友鶴』（『稀書複製会叢書』，米山堂，1927所収）より

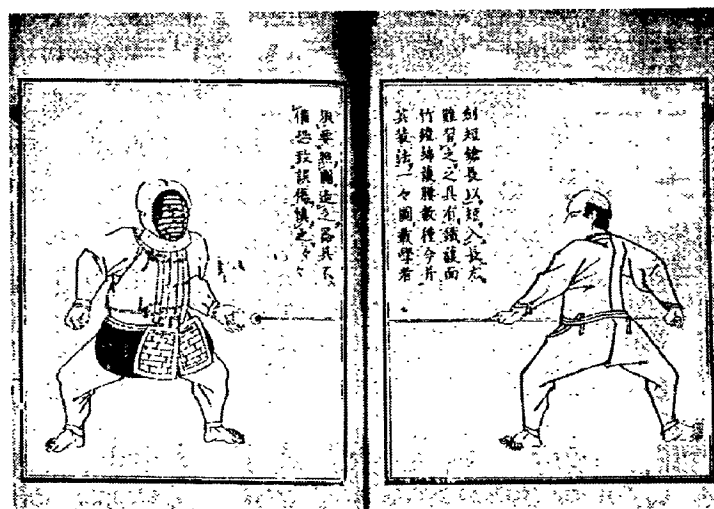


図2 柏淵有儀『芸術武功論』（1768）〔筆者蔵・文陽堂書店復刻本（1931）〕より

剣道の発達過程に関する研究

たしかに下川の言うように、天保期以降に突き技が一般的となる剣術よりも、それ以前から「面突」や「胴突」の技があった槍術の方が、安全面の確保という点で道具（防具）の必要性はあったと思われるし、剣術がこれを参考に道具（防具）を改良・工夫したということはあるだろう。ただし、そのことから剣術よりも槍術の方がより早く（試合者双方が面を着けての）相面稽古・試合を行っていたと推論することには、慎重でなければならない。

というのも、上記の図に共通することとして、槍を持つ側の人物が道具（防具）を着用していないことがあげられる。これは、近世中期頃までの槍術の稽古や試合では相面試合は未だ少なく、入身（長槍に対して、それよりは短い剣・短槍・薙刀などをもって、長槍を持つ相手の手元に詰め入る修練）の稽古をする側のみが道具を着用し、それを突く側（突身）は着用しなかったとする島田氏の説があり、そのことを裏付けているからである。『千代の友鶴』の図については、中村氏も入身稽古のものであることを指摘しているし⁷⁾、とくに『芸術武功論』の図は、美濃大垣藩・正木流槍術の稽古風景を描いたもので、その解説文にも「剣短鎗長、以_レ短入_レ長、尤難。習_レ之之具、有_二鉄護面・竹鎧・綿護腰数種_一。今、并_二其装法_一、一々図載…」とあり、入身稽古を図示したものであることは明らかである。

Ⅲ 槍術における相面稽古・試合の誕生（明和～安永期）

では、槍術において相面（両面ともいう）での稽古・試合が活発になるのは、いつ頃からであろうか。榎本鐘司氏が紹介して以降、これも諸書に引用されるようになった芝岡馬維貞著『四芸沿革考』（1832、愛知県刈谷図書館蔵）という弓・馬・剣・槍四術の沿革・変容を詳述した文書がある⁸⁾。同書には剣術については①竹ひご面の着用、②蒲団つき竹ひご面と綿入り小手の着用、および袋^{ふくろ}撓^{しな}の使用、③撓^{たわ}まない割り竹刀^{しな}（コミ竹刀とも）の使用と竹具足（胴）の着用、という三段階の変容が記され、槍術についても①先端にタンポをつけた竹刀（竹製稽古槍）の使用から、「打ち」・「張り」という技術の出現に伴う檜の木製稽古槍への変化、②鉄ひご面と手袋（先手のみ）の着用、③綴^{しころ}付き面と竹具足を着用しての荒技修行（相面稽古・試合）の開始、という三段階の変容が示されていて、両術の技術・道具の発達過程を知るうえでの好個の史料である。ただ惜しむらくは、これらの変容がいつの時代・時期であるのかが明記されていないため、両術の変容を時系列に並べて論ずることが難しい。

槍同士の試合そのものは近世初期からみられ、宝蔵院流高田派を修した久世大和守広之（老中、下総関宿藩主）が寛永13年（1636）に記した『鍵秘書』には、十文字槍流儀の立場からみた他流（素槍・鍵槍・管槍）への対応が事細かく記されていて、「しんけん（真剣）または他流仕合の時は顔をつくべし」とあり⁹⁾、流派を超えた試合が行われていたことがわかる。ただし、これが鉄面などの防具を着けての相面試合なのかは、久世の文章からは判然としないが、中村氏は前掲書のなかで山鹿素行の隨筆「綴話」の記述から、江戸初期のころから槍術と剣術では具足（胴）・鉄面を着けての稽古があったと類推しており、久世のいう他流試合もそうしたものであったかもしれない。

その後、慶安期（1648～52）を過ぎる頃になると、種々のトラブルの元となることが多かったこ

と治安維持のため、武術の他流試合は幕府によって表向きは禁止される。しかし、本心鏡智流（鍵槍）の基本伝書である『本心鏡智流鍵槍 仕相稽古之次第』（流祖・梅田治忠以来の伝書の一巻）には、「諸流之事^{わざ}」の項に十文字槍・薙刀・素槍など他流の技術的特徴が記されており、「右諸流共に、いろいろ様々能鎗有妙有といふとも、突につきやう有、張にはり様有、入に入様有、事の品々あんばい第一也。此外妙なし」と述べられている¹⁰⁾。この記述からも、どのような道具（防具）を着用しての槍術であったかを窺うことはできないが、梅田治忠が延宝元年（1673）から江戸に住し元禄7年（1694）に没した人物であり、『本朝武芸小伝』（1716）にその門が比類なく盛んである様子が記されているので、1600年代の終りから1700年代はじめにかけて、流派によっては他流（他種類槍）の技術研究が進んだのかもしれない。

槍術文書類において「仕合」（試合）に言及した記述が多くなるのは、1700年代半ばを過ぎてからである。中村氏前掲書にも紹介されているが、宝暦13年（1763）に佐分利流（鍵槍）の柴田勘兵衛照朝が記した「佐分利流口伝集」には、「仕相竹刀^{しあいちくとう}」（稽古・仕合に用いる稽古槍）の牡丹（タンポ）の拵え様をはじめ他流の槍の製法との違いが克明に記されている¹¹⁾。

また、種田流（素槍）では早くから試合を重んじていたといわれるが、明和期（1764～72）の初めに同流平田派二代・平田重方が記したとされる「種田流鎗術初段之伝」に、「治世稽古場ニテ仕合ニ勝コトバカリヲ鎗トハ言ベカラズ。事理兼備シテ、事アル時ハ主君ノ為ニ大功ヲ成サンコトヲ思フベシ」、「何方ヘ参リ仕合仕候トモ、先ヅ其場ヘ出タラバ其場所ノ広狭、或ハ横ニ沼アリ、或ハ溝欄アリト言事ヲ能ク見積テ、扱仕合ニ掛ル時ハ礼儀ヲ厚シ、互牡丹ヲ改テスベシ」とある¹²⁾。これは、当時の槍術において試合に勝つことにのみにとらわれ、槍修行の本文である「一旦事ある時に忠君を果すための修練」という側面が薄くなってきたことを示しており、その一方で、お互いに牡丹（タンポ）を^{あらた}め、礼儀を厚くして試合を行うなど、槍術他流試合の基本的形式が形成されつつあったことも窺える。

また『槍術或問』（別書では「鎗術^{しあい}雌合目録」ともいう）も種田流の基本伝書の一つであるが、これも明和期（1764～72）頃の成立とされ¹³⁾、同期の槍術の様相を記していると思われる。同書は問答形式で書かれており、「長十文字、二間一尺ノ鍵、拳世是ヲ賞ス。其事ヲ見ルニ、或ハ相突ノ鍵ハ面ヲ打、或ハカケ、又十文字ハ搦ミハリ捨ルコト甚烈シ。是ニ全勝ヲ可^レ取事如何」という問いに対して、

彼カケ・打・カラミ・相突ヲスルヲ禦ント思フ故ニ、其間虚ニナリテ皆其難ヲ防ニ成テ、相手ニ誘レ虚動スル也。鍵・十文字ヨリ欲スル処ノ利ヲアタヘ、後全勝ヲナスベシ。若、鍵・十文字ヨリ此理ヲ知テアタユル処ノ利ニ乗ラズンバ、即是長横手ノ詮ナク、素槍ノ意味ト同前ナルニヨリテ、横手却テ害トナルコト必セリ。一中略一。長ヲ恃ミ横手ニ便リテ相突・打・張・掛・搦ナント思フ心、豈虚動セザルベケンヤ。畢竟、入身・長横手ハ初心ノ素人勝シルシハヤク見ユル故、世人是ニ迷者乎。

と答えている。

この問答は素槍の立場から述べられたものであり、鍵槍や十文字槍への批判的内容があることを勘

剣道の発達過程に関する研究

案しなければならないが、①明和期頃にすでに槍術の稽古・試合においては、鍵槍・十文字槍の横手流儀は面を打ち、鍵で引っ掛け、十文字で搦み、張るなど突き以外の技術も駆使しての烈しい遣い振りをするようになったということ、②一般にはそのような烈しい遣い振りの横手流儀（鍵槍や十文字槍）の方が、素槍流儀よりも高く賞されていたこと、などが読み取れる。

さらに安永5年（1776）に米沢藩伊藤流早槍（管槍）の平林正相が著した『伊東流早鎗秘書』には、「仕合とても、常に竹武具や鉄面にていたす仕合は、実の時の仕合とは大き違ふたり。竹武具・鉄面にての仕合には打と払ふとの術働はならず、只突より外の事はなし」という表現がみられる¹⁴⁾。これらの史料から見ると、1770年代頃までに槍術においては鉄面や竹具足を着けての烈しい遣い振りの相面稽古・試合が流派によっては行われるようになり、稽古槍の製法も進歩したことが窺える。

ただし、ここでひとつ注意をして見なければならないのは、前出『伊東流早鎗秘書』の記述から、この時期の鉄面や竹具足を着けての稽古・仕合では「打ち」や「はり」の技術は発揮しがたく、どうしても突きあうだけの単純な動きになりがちであるという側面もあったということである。これは、剣術においても寛政期には流派によっては面・小手以外に竹具足も着用するようになるが、一方で竹具足の形状や材質が剣術の動きを妨げるものとして天保期に至ってもあえてこれを着用しない流派があったこと¹⁵⁾を想起させるものである。

IV 為政者側の槍術相面試合奨励（天明期～寛政期）

拙稿「剣道の教材化過程に関する研究 ―藩校教育における体錬的剣・槍術の採用―」¹⁶⁾においても触れたが、剣・槍両術の発達過程を見る場合、欠かす事のできないものとして、天明・寛政期（1781～1801）における為政者レベルによる剣・槍両術相面試合（他流試合）の奨励がある。享保の改革で武芸を奨励した徳川吉宗の孫であり後に老中となる松平定信は、天明2年（1782）に『修身録』¹⁷⁾を著しているが、このなかで、

剣術当時は多く理屈の流はやりて禅学の如くになり、凡剣術ハ、何かしらずに打あふ所に自然と勝負の味を覚えたるが本の事也。一中略―。鎗も剣も具足を着て突あひ打あふ流儀をまなぶべき事也。一中略―。大名と鎗の仕合するならば、面を突くべし。大名というものは仕合にも胴ハつかれても面ハつかれた事なき故、必ず面があくべしといひし也。

と述べている。ここで定信が「鎗も剣も具足を着て突あひ打あふ流儀をまなぶべき」と述べるのは、剣術でいえば直心影流・神道無念流・心形刀流・鏡新明智流などのちに幕末剣術界の有力道場となる撃剣（試合剣術）流派がそれぞれにこの時期までに江戸に道場を構えていたことが背景あるものと思われる。一方でこの一文は槍術においても「具足を着て突あひ打あふ流儀」すなわち相面稽古・仕合を行う流派が顕れてきたことを示している。「大名というものは仕合にも胴ハつかれても面ハつかれた事なき故、必ず面があくべし」という表現からは、面や胴（竹具足）を着用しての相面試合が、天明期には上級武士の間でも一般化してきていたことを示唆していよう。

定信は老中になる以前、奥州白川藩主として襲封した時（1783）に、家士たちに『白川候傳心録』¹⁸⁾という教諭書を示し、道場のなかだけの武術修行ではいざという時の役に立たないので、五里

～七里も歩きくたびれたときにこそ槍術や剣術の働きを試して「息合」（息継ぎ、息遣い）の稽古をしておくことや、平日の勤番中でも特段用のないときには、木馬（馬術）・巻藁（弓術）・竹刀（槍術）・しなへ（剣術）を稽古しておくこと、およびそれらの武術はたとえ流儀違いであっても遠慮なく試すこと（すなわち他流試合であり、その方法もおそらく相面仕合）などを薦めた。これらは後の寛政の改革における武芸奨励の基となった。

こうした定信の奨励するような武芸教育策を自藩にいち早くとり入れたのは、津山藩であった。これも、諸書によく引用されるものであるが、津山藩では五代藩主松平康哉が天明7年（1787）に「稽古場御定書」¹⁹⁾をだし、とくに剣術・槍術の「師範役吟味」について、以下の通り定めた。

剣・槍一流師範役吟味の節ハ、剣術は剣術^{のみ}而已、槍術は槍術而已、一家中之内諸流世話代のもの呼出し、十本宛の仕合申付、勝負の品歩付をいたし、六歩已上勝候はば師範申付べく候。五歩に候はば、同門の内一通り他流仕合一同一覧の上、六歩已上面々も有^レ之候はば、猶右の面々の内吟味を詰、師範役可^レ申付^レ候。若、一流門人中にも五歩以上の勝無においては一流滅亡可^レ為候間、門人何れ成共致^レ弟子入^レ、師匠を取可^レ致^レ修行^レ候。一中略一。但、右他流仕合は一家中限之建之儀に候間、一流の建に不^レ預、剣術はしなへ・面・小手、槍術は槍術、直槍は直槍、鍵は鍵、十文字は十文字にて其流技^{（マツ）}々々の可^レ為^レ槍。尤、面・小手・具足たるべし。勿論、剣術は剣術、槍術は槍術、其惣師範のもの可^レ致^レ出席^レ候。流技に寄、面・小手を不^レ用流技は勝手次第といへ共、相手もの右に准じ候に不^レ及候事。

このように大変過酷な師範役の峻別が行われ、剣・槍両術の流派が淘汰された。また、剣術は「しなへ・面・小手」を用いての他流試合であり、槍術は「面・小手・具足」を着用し（着用しないことも自由）各流儀の稽古槍を用いての他流試合（相面試合）であった。津山藩でのこうした試みはつづく寛政期にも盛んに行われたが、おそらくは武芸奨励に熱心な藩主のいた藩では津山藩と同様の傾向、すなわち剣・槍両術における相面稽古・試合が奨励されたものと推量される。このように天明期に剣・槍両術ともに道具（防具）を着用しての相面稽古・試合が奨励されはじめ、つづく寛政期の世相と相俟って、その普及・一般化の進度が加速してゆき、文化期以降にその盛期を迎えたのであろう。

V 文化期以降の槍術の稽古・試合

中村民雄氏が前掲書ほかで紹介している会津藩日新館の槍術稽古を示した図（1812）²⁰⁾は、明らかに相面稽古・試合の様子を示しており、先にみた天明・寛政期における槍術相面試合が文化期には他藩に及んでいたことを示している。ついで天保期（1830～44）になると、老中・水野忠邦の武芸奨励策の一環として他流試合の禁が解かれ、藩邸試合・他流試合や廻国修行が盛んに行われるようになり、剣術・槍術においても流派間交流が進んだ。そうしたなかで剣術においては千葉周作の北辰一刀流に代表されるような、現代剣道には近い技術・道具を有する流派が台頭するようになり、また、次章で紹介する筑後柳河藩士・大石進の江戸出現を契機として長竹刀が流行したことにより、技術や道具に大きな変容がもたらされた。槍術・剣術ともに試合の勝敗のみに拘泥する傾向があらわれ、その結果、剣術のしなへは長竹刀でかつ軽量のものが好まれるようになり、槍術の稽古槍は細く（軽く）

かつ小牡丹（小さいタンポ）のものが好まれるようになった。

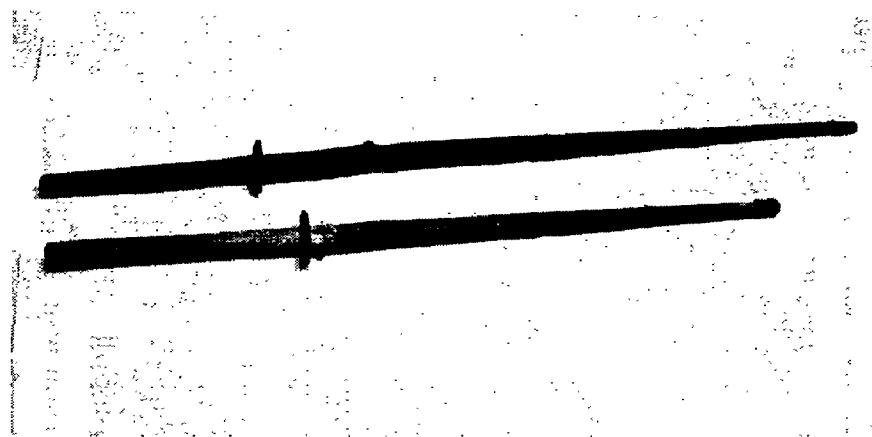


図3 四尺八寸の長竹刀と、三尺八寸の竹刀（大英博物館蔵、筆者撮影）

内海流（鍵槍）の内海重棟が天保12年（1841）に著した『弄槍論』には、当時の槍術試合の様子が詳細に述べられているが、そのなかに、

先相面の素槍といふものは、互に二間余の細こきにしたるしなやかなる槍を携へ、左の方を偏袒^{かたはだぬき}、胴当をする事もなく、ひらりひらりと槍をあやどり、追つかへしつ突くといへども、吾を防ぐいとまに突く事なれば、軽く突ては軽く引取、屈伸手捷く手練を尽す事、甚手奇麗にして目ざましき事也。尤敵の胴を突けば吾面明く故、互に面と面との責合にて、胴を突く事はまづなし。是しかし、入身をしたるものの見ては、齒がゆきばかり果しなきものなり。

とあり²¹⁾、稽古槍が細くなった（軽量化した）ことと、技術が単純化しなかなか決着がつきにくくなったという、試合偏重型槍術相面試合の特徴が記されている。藤田東湖（水戸藩主徳川斉昭の側用人）や川路聖謨（佐渡奉行、勘定奉行などを歴任）らをはじめ識者は、剣・槍術の相面稽古・試合についてその精神的・体錬の効用を認めながらも、試合偏重の傾向に対しては武術本来の姿からは遠く実用に供さないものとして批判した²²⁾。

また、安政3年（1856）に旗本・御家人の子弟教育を目的として幕府は「講武所」を開設したが、そこでは剣術・槍術ともに形稽古は廃して試合のみとされた。榎本鐘司氏の研究に詳しいが、この講武所の頭取をつとめた男谷精一郎信友（直心影流）の考え方などもあって剣術の撓^{しなえ}は柄^{つか}も含めて総長三尺八寸（約117cm）以内と規定され、槍術においてもタンポ（牡丹）は「革にて円径三寸五分（約10.6cm）より小さきは相ならず候事」と定められて²³⁾、無制限な試合偏重への制限がなされ、「実用」との共存が図られた。

ここで、この講武所開設にあたってその総裁たちが老中に差し出した「心得方大意相伺候書付」に、「鎗者両面試合に仕、素鎗・鎗^{かぎ}・十文字・長刀^{ながなた}等用意いたし置可、申候。管、同断」とある²⁴⁾ことに注目したい。これについては中村民雄氏が、「このことにより、槍術は剣術と同様に、流派の壁を超えて共通の条件で試合をすることが可能となった」と指摘している²⁵⁾。別の見方をすれば、わ

ざわぎ槍術に対して「両面試合（相面試合）に仕」と断っていることは、この時期に至っても槍術においては相面稽古・試合以外の形式、たとえば「入身・突身」の稽古・試合形式などが色濃く遺っていたことを示唆している。

旅川流槍術（十文字槍）を修めた米田是容（幕末期の熊本藩家老）は嘉永4年（1851）に『武技論』を著しているがそのなかで、「熟芸の人たり共、入身をば廃すべからず。是を壮年の芸なりとして突身のみ心懸るは、流意を知らずというべしなり」と述べている²⁶⁾。前出内海流の『弄槍論』も、古くは主人が面を掛け入身をし臣下がこれに突身をするということもあったが、今（天保期）では臣下のみが面を掛けて入身をし高貴の人は長槍での突身のみを稽古する傾向がある、と指摘している²⁷⁾。これらは、槍術の稽古・試合において、幕末期に至っても「入身・突身」形式の稽古・試合が行われていたことを意味し、またそこでは、上級階層や経験者ほど苦痛・労苦を伴う入身稽古を忌避し、突身稽古のみに専念する傾向があったことを示している。こうしたこともあって幕府講武所ではあえて入身・突身稽古は採用せず、「両面試合」（相面試合）と限定したのかもしれない。

さらに「心得方大意相伺候書付」に戻ってみると、「素鎗・鎔鎗・十文字・長刀等用意いたし置可し申候。管、同断」とある。前出『弄槍論』に、鍵槍は先端こそ牡丹（タンポ）で包むが、鍵（鉤）は真物（鉄）を用いるので場合によっては死傷に至ることもあり、そうした意味で鍵槍と素槍との相面試合は難しいとも述べられている²⁸⁾。各流儀持参の稽古槍を用いての稽古・試合ではなかなか公平性を保つことが難しいとの判断があり、そのため四種の槍を講武所側で用意することが提案されたのだろう（実際には各自の稽古槍を持参することが認められたが）。

講武所が設立され（安政3年）相面稽古・試合が採用された頃には、多くの藩において槍術の相面稽古・試合が剣術とともに実施され、廻国修行も盛んに行われた。また、剣術同様、槍術の胴も竹具足に代わって革胴が使用されるようになり、その革胴も突いてきた相手の槍先が少しでも左右に逸れるように、相手に向く斜左前の方向を特に強く張り出した革胴（「安政三」とよばれた）が作られるようになり、同様の趣旨から面鉄も前方に強く突き出した急角度のものが作られるようになったという²⁹⁾。このように槍術の試合技術・道具は剣術と同様、幕末期に相面試合用に特化した変容を遂げる。

しかし、その後、明治期になると長槍を駆使しての槍術はその存在意義を失い、無用の長物とみなされるようになり、諸武術のなかでもとくに急激に衰退した。その後は、銃剣術のなかにその技術的特性を残すことが図られ、あるいは大日本武徳会の武徳祭において形の演武を行うことなどで、いくつかの流派は命脈を保ってきた。また、今日では尾張貫流（管槍）など一部を除いて、相面形式の稽古・試合は行われなくなっている³⁰⁾。

Ⅵ 大石進（種次）の剣術技術と、槍術の影響についての再検証

剣道（剣術）史における筑後柳河藩士・大石進（種次）の事跡は、夙に有名である。天保年間（1830～1844）に二度江戸在勤をし、当時珍しかった五尺三寸の長竹刀、左片手突き、および胴技とをもって江戸中の著名剣士を撃破し、勇名を轟かせたといわれる。また、彼は旧来の剣術道具に大改良を加え、今日の剣道具の基礎を築いたともいわれる。前述したようにこれら大石の剣術技術・道具の改良

には、槍術の影響が見逃せないと従来より指摘されてきたが、本稿の最後にそのことの再検証をしてみたい。

1. 大石家の槍術・剣術

大石進（種次）は寛政9年（1797）、父種行の嫡男として筑後国三池郡宮部村（柳河藩領）に生れ、文政3年（1820）に同藩槍・剣術師範であった祖父種芳から大島流槍術の免許を受け、2年後の文政5年（1822）には同じく種芳から愛洲影流剣術の免許を受けた。種芳には子がなかったため、同藩士分・田尻藤太家より養子を迎えたが、これが進の父種行である。文政5年（1822）4月に祖父種芳が亡くなり、その後父種之が同藩槍・剣術師範の役目を継いだ。種行も文政8年（1825）に他界したので、同年に進（種次）が柳河藩槍・剣術師範役となった。しかし、ほどなく大島流槍術の師範役は同門の加藤善右衛門に譲り（加藤善右衛門の大島流は全国的に名を馳せ、多くの門弟を抱えたという）、剣術師範のみに専念した（その理由は、大石家はもともと在郷半農の士で禄高も高くはなく、家計を支えるために農作業にも精を出さねばならなかったことと、柳河藩だけでなく三池藩の師範役も兼ねていたため大石道場への修行者の出入りが多く、その経営で手一杯であったためと伝えられている³¹⁾）。

榎本鐘司氏が明らかにしたように、文政7年（1824）頃に写された「川崎八郎手控」（『撃剣試合覚帳』所収）には、「筑後柳河 神陰流^{（ママ）} 大石太郎兵衛」の名がみえる。化政期には（公には他流試合は解禁されていなくとも）廻国修行者が訪れたときには、これに立ち合う武術家たちがとくに西日本各地には多くいた³²⁾。大石進の祖父・父ともに「太郎兵衛」を名乗っているが、彼らもそうした一人であり、進自身もまた幼少期から廻国修行者の剣術・武術を目にする機会は多くあったであろう。

2. 大石進の剣術技術と槍術の関係、その再検証

前記したように、大石進が柳河藩の槍術師範も兼ねたことがあるため、彼の剣術には槍術の影響が強いのではないかと推論されてきた。前出榎本氏は、「刀の先尖は突筈のものなり」という発想から大石が突き技を工夫したとする藤吉齊氏著『大石神影流を語る』の記述を参考にしながらも、

しかし、その技法には槍術の影響を考えるべきであろう。特に、大石は五尺三寸の長大な竹刀を用いて「片手突き」を得意としたというが、この片手突きの「間合」は当時の剣術のそれではなく明らかに槍術の「間合」である。この間合における有利さが試合を決定づける大きな要素であったと考えてよいであろう。他流試合の流行にともなう竹刀の長大化傾向も、ひとつにはここに起因すると考えられる。

と指摘し³³⁾、また、中村民雄氏は剣術における道具（防具）の改良について、宝暦年間における一刀流中西派の防具採用に加えて、

もう一つは、天保年間（1830 - 1844）に柳河藩の大石進が江戸へ出てきて、五尺三寸余の長竹刀を用いて、突きと胴切りで名だたる師範をことごとく打ち負かしたということである。大石が、大石神影流の剣術と大島流槍術の師範を兼ねており、長竹刀を用いて、槍術の突き技を応用した独特のわざを駆使したことによるものである。それまで江戸の剣術は、剣術対剣術を前提に、打撃を中心に技術が発展してきた。そこへ、突き技という江戸ではあまりなじみのない

わざが使われ、技術的な弱点をもの見事に衝かれた格好となったものである。また、大石にしてみれば、剣術も槍術も使いこなせることから、防具も両術に耐えられるものを持参してきたのであるが、江戸で流行していた防具は、『北斎漫画』にみられるように、剣術用として独立したものであり、どうもその防具には「突垂」がなかったようである（括弧内筆者）。

という見解を示している³⁴⁾。筆者は、大石進に関する著作や槍術関係の資料を管見するうちに、これらの見解には若干の補足が必要であろうと考えるに至った。前出・藤吉氏氏は『大石神影流を語る』のなかで、

進の父種行は剣術ばかりでなく槍術の師範であり、また進自身槍術の名手であったから突技の着想は槍に得たのであろう、即ち長竹刀を手槍のように使って突き、これを難いで胴を切る手法を発明したというのが諸家の一致した見解である。この槍術着想説は一見うがった推理にみえるが、これは「突き」「槍」という言葉連想に基く誤解である。（大石神影流）刀術目録で突技の動機を述べた条に、「刀の先尖は突筈のものなり」とあって、進は刀の構造を分析して突くという認識に到達していることは明らかで、そこには槍術説を裏付ける言葉は、一言半句も述べられてはいない。剣術の型には突技をとり入れたものもあり、実戦における突技は屢々用いられている。ところが撃剣の教習法として、進以前にこれを採用したものはなかった。この意味で突技の採用は撃剣界の革命でもあり、画期的な事件であったといえよう。突技には諸手突の他に左片手突があるが、これは彼の天性に出たものであって、性来左利きでなかったならば、恐らくこの技法は生れなかったかもしれない。これらの突技が斬ることが眼目となっている当時の剣法界に毛嫌いされ、異端視されたことは当然であった。十八才を境にして進の剣法は一変した。即ち愛洲陰流の面・籠手打の刀法から更に突と胴斬りの技が加わって複雑を極め、激しい剣法に変化したのである。

と述べ³⁵⁾、槍術と突技を簡単に結びつけることに異を唱え、左片手突きは進の利き手との関係によるものであること、および突技は剣術の技としては元々あったのを大石がそれをはじめて撃剣に採用したため、それが異端視されたものと推論している（ちなみに、水野忠邦は、大石を自邸に招請して家臣たちに稽古をつけさせたが、「誠に兼て承及候より珍敷業と相見」との感想を大石に述べた³⁶⁾）。

また、大石家の後見人でありかつ大石道場の四代目師範であった板井真澄の子である板井真一郎氏はその著『大石神影流の周辺』のなかで、大石が剣術よりも先に槍術の免許を受けていることから彼の剣術への槍術の影響を認めつつも、やはり左片手突の考案はその左利きと長身を利用したものであり、長大な竹刀も大石神影流の定寸（乳首の高さまで）からいえば、大石の長身に見合った竹刀を使用したと推考している³⁷⁾。

筆者は、これら藤吉氏や板井氏の説には首肯すべき点があり、また槍術の技術的特性などからも、大石進の剣術における槍術の影響をみる場合には、下記の諸点に留意しなければならないと考える。

- ① 近世後期における槍稽古（とくに長槍）は通常左半身となり、（馬庭念流槍術などは右半身であり、短槍系統では左半身・右半身と変化することもあるが、これらの例外を除いては）左手前に持って使うのが普通である。また、大石は前記したように柳河藩大島流槍術師範の役

剣道の発達過程に関する研究

をのちに同門の加藤善右衛門に譲っているが、その柳河藩加藤派大島流では、「前足先をやや内に入れ、上体を真の半身に開き、後足を扇の開いたようにやや側後方に向けて踏んだ形（これを八文字の足踏みという）」という足踏みでの左半身であった。大石が左片手突を用いたということは右半身であろうし、大石の左片手突きと大島流槍術の突きとの関係を簡単には結び付けられない。

- ② 竹刀の長さが五尺三寸（約160cm）と長大であったといわれることも、よく槍術との類推をされる理由である。たしかに五尺三寸は竹刀としては長大であるが、稽古槍は通常長いもので二間（約360cm）、短いものでも九尺（約270cm）はあるので、櫓の木でできたこれら稽古槍を用いる技術と、竹でできた160cm程度の竹刀を用いる技術とは、自ずと違ったものになるのではないだろうか。また、竹刀での片手突きは柄頭一杯に握っての左片手突きであっただろうが、槍は、（右手元いっぱいにもつ流儀もあるが）通常はバランスよく保持するために一尺余ほど右手元を余してもち、前進とともに両手を前方に伸ばして槍を繰り出して突く。左手の持ち方は流儀によって様々ある（貫流のように管を用いる流儀もある）が、左手の掌中を槍が走る（手走り）ようにして突く。このような槍の突き方と、左手での竹刀の片手突は運動の形態や質の面でも異なるものと思われる。
- ③ 仮に誇張ではなく（大石武楽記念碑にあるように）身長が七尺（約210cm）あったとして、乳首の高さが（板井氏説のとおり）大石神影流の竹刀の定寸であるならば、それはおよそ身長70%であり、したがって四尺九寸（約150cm）が大石にとっての「定寸」となる。つまり、五尺を若干超える竹刀を使ったとしても、彼の剣術流儀の規矩・本則を大きく超えるものではなかったということになる。

このようにみえてくると、大石進の剣術技術を、槍術技術の影響とみるのにはかなり注意が必要と思われる。ただし、彼の剣術道具の改良については、次に述べるように槍術の影響はある程度あったかもしれない。

3. 大石進の剣術道具改良説の検証

『福岡県篤行奇特者事蹟類纂』（1896）所収の「大石武楽ノ事歴」も榎本氏の論考によってよく知られるところとなったが、これは前出板井真澄（大石道場四代目師範）所蔵書類および伝聞から福岡県教育会が取りまとめたもので、大石進（種次）の剣術道具改良について次の様に記している³⁸⁾。

当時、唐面ニシテハツ割ノ袋品柄ニ長小手ヲ用イタリシガ、武楽（大石進種次）新二十三本穂ノ鉄面ヲ製シ、袋品柄ヲ廃シテ四ツ割ノ品柄ヲ造リ、且竹腹巻ト半小手ヲ製シ用ユ。一中略一。是ノ時ニ当リ、我國內至ル所何レモ唐面・袋品柄ノ法ナルニ、独り大石ノミ鉄面・込品柄ノ新制ヲ用イ其技ヲ振ヒシカバ、他流何レモ其試合ヲ嫌忌シタレドモ、終ニ全国皆大石神影流ノ新制ニ倣ヒ、何レモ鉄面・込品柄・腹巻・半小手等ヲ用イルニ至リ、今尚其制ヲ用ユ。

大石が、十三本穂の鉄面と竹腹巻、および四つ割りのコミしないを作ったとあるが、鉄面や竹腹巻（竹具足）そのものは本稿でみてきたように槍術や他の剣術流派でも1700年代後半から用いられており、また前出『四芸沿革考』（1832）にみたように、天保期のはじめにはすでに^{たわ}撓まない四・五本割

のコミしないが使用されていたことが明らかであり、これらは大石のオリジナルというわけではない。文中にある唐面（竹製または藤製の面）と袋品柄^{しなえ}は、前出藤吉氏の指摘にもあるように、九州地方陰流系統防具の特色を示している。したがって、この「大石武楽ノ事歴」に記されていることは、当時九州地方にあった陰流系統の防具に比して堅牢・頑丈な道具・防具を、他の剣術流派や槍術の道具などを参考に大石が開発したことを示している、と見たほうがよいだろう。

筆者はむしろ、堀正平が『大日本剣道史』（1934）で大石に敗れた剣士達の談として、

大石の道具は、槍のを改良したもので、面金は中高で突いても滑る、面垂も幅が狭いので中り悪いから得が多い。之に反して我々のは、竹刀は短くて弱く、大石のに比すれば漸く半分余りで、面金の山形は低くて突が止り、猶其の附根の革も^{なめ}鞣しで大きいから、それにも突が止る。面垂は多くはないがある者は三寸余もある。我々が負けたのは伎倆でなく道具と方法の為であると

と述べている³⁹⁾ ことに注目したい。堀は、これが誰かからの聞き書きなのか、あるいは何かからの引用なのかを明記していないが、前述した槍術道具「安政三」の例から勘案すれば、天保以前から槍術において相手の突を逸らすための手段としての「中高面」の工夫が始まっていて、それを大石が剣術に応用したとも考えられる。先にみたように、大石道場には柳河・三池両藩士はもちろん、他藩・他領からの来訪者もあり、江戸出府以前に最新の剣術・槍術道具の知識を仕入れていて、それを剣術道具の改良に生かしたということは十分に考えられる。

Ⅶ おわりに

本稿では、剣術の発達過程における槍術の影響を検証するために、まず槍術における試合の発達過程を時系列に調べ、それをもとに剣術への影響をみてきたが、それらは以下の様に要約されるであろう。

1. 近世中期の槍や薙刀の稽古での「面」や「竹腹巻」（竹具足）が、剣術防具に影響を与えたであろうと推考されることが多いが、これらの絵は槍術における「入身稽古」（槍を持つ方は防具を着けず、槍に対して剣・薙刀・短槍などで入身の稽古をする側のみが防具を着ける）という稽古形態を示したものであり、この形態はかなり時代が下がった幕末期においても行われていた。
2. 槍術において試合者双方が道具（防具）を着けての相面稽古・試合が行われるようになるのは1700年代後半に入ってからであり、その意味では、直心影流や一刀流中西派が1700年代前半までに道具（防具）を着けての打ち込み稽古を開発していた剣術よりも、むしろ遅いといえる。また、1700年代後半までには面・竹具足を着用しての激しい稽古振りが槍術においても行われるようになったが、それは一方で、打ち・張りなどの技術を発揮しにくくするものであり、槍術技術を単調化するものであった。
3. 天明期以降の為政者による奨励もあって、槍術においても剣術同様相面稽古・試合は普及して行き、幕末期にはその盛期を迎える。しかし、一方で入身・突身という片面稽古の形式も

剣道の発達過程に関する研究

色濃く遺されていたことは、剣術といえばほぼ撃剣（相面での稽古・試合）のことをさすようになる剣術とは、その発達過程をやや異にする。

4. 剣術道具・技術に画期的変化をもたらしたとされる筑後柳河藩士・大石進の剣術には槍術の影響があったとされるが、彼の長竹刀と技術は、槍術の影響よりも、むしろ彼の人並み外れた巨軀と左利きとに由来するものであった。ただし、その道具（防具）の改良については、当時の剣術・槍術道具（防具）の最新情報からヒントを得て作成されたものとみられる。

結論としては、近世における剣術と槍術は武士の表芸としてともに奨励されてきた歴史があり、その意味において道具（防具）の開発・改良などでは相互に影響を与えたと思われるが、その技術や稽古・試合形式の発達過程については、（ある程度は互いに影響を与えたかもしれないが）どちらかといえば、それぞれにおいて独自に開発・改良されてきた側面が強いといえよう。

<注>

- 1) 島田貞一：槍術。日本武道大系第七巻，同朋社出版，1982，所収，6 - 8頁
- 2) 富永堅吾：剣道五百年史，百泉書房，1972，60 - 62頁
- 3) 渡辺一郎編：武道の名著，東京コピー出版部，1979，所収，300頁
- 4) 中村民雄：今，なぜ武道か—文化と伝統を問う—，財団法人日本武道館，2007，246 - 247頁
- 5) 中西是助：一刀流兵法韜袍起源考，1808。前掲書3所収，159頁
- 6) 下川潮：剣道の発達，大日本武徳会本部，1925，277 - 278頁
- 7) 前掲書4，231頁
- 8) 渡辺一郎編：武道伝書聚英第十集，自刊，1988，所収
- 9) 前掲書1，所収，235頁
- 10) 前掲書1，所収，358 - 359頁
- 11) 前掲書1，所収，346頁
- 12) 前掲書1，所収，161 - 162頁
- 13) 『槍術或問』（鈴鹿家文書。全日本剣道連盟蔵写本）は，奥書に「川口助之進通義」の署名と寛政7年（1795）正月の日付があるもので，内容的には種田流の「鎗術しやうい雌合日録」と若干の字句の相違を除いて，ほぼ同一内容のもの。「鎗術雌合日録」は，前掲書1にも所収されているが文政13年（1830）のものであるので，本稿では『槍術或問』を使用した。
- 14) 前掲書1，所収，369頁
- 15) 長尾進：試合剣術の発展過程に関する研究 —「神道無念流剣術心得書」の分析，武道学研究29巻1号，1996
- 16) 長尾進：剣道の教材化過程に関する研究—藩校教育における体錬的剣・槍術の採用—，明治大学人文科学研究所紀要第48冊，2001
- 17) 松平定信：修身録，1782。江間政發編『楽翁公遺書 上巻』八尾書店，1893，所収，10 - 11頁
- 18) 国立国会図書館蔵本など写本多数。「白河家政録」「白河侯戒論」など異称あり。
- 19) 「旧津山藩学制沿革取調要目」より。『日本教育史資料』，所収
- 20) 前掲書4，238頁
- 21) 前掲書1，所収，314頁
- 22) 藤田東湖『常陸帯』，および川路聖謨『見聞偶筆』より。菊地謙二郎編：東湖全集，博文館，1940，所収

- 23) 東京市役所編：東京市史外篇 講武所，同市役所，1930，34頁
- 24) 同前，17頁
- 25) 前掲書4，241頁
- 26) 熊本県教育会肥後文教研究所編：肥後武道史研究資料 第五輯，同研究所，1939，および，渡辺一郎編：武道伝書聚英第十集，1988，自刊，所収，106頁
- 27) 前掲書1，所収，318頁
- 28) 前掲書1，所収，313頁
- 29) 烏田貞一：槍術。講談社・ベック編：日本の武道 槍術・杖道・馬術・水術・砲術・忍術・手裏剣術・鎖鎌・契木・諸芸，講談社，1983，99 - 100頁
- 30) 前掲書4，229・242 - 243頁
- 31) この項，板井真一郎編：大石神影流の周辺，自刊，1988，より
- 32) 榎本鐘司編：資料・近世農民の武術（一）伊予史談会文庫蔵『撃剣試合覚帳』，自刊，1991，より
- 33) 榎本鐘司：幕末剣道における二重的性格の形成過程 ―競技性の顕在化および伝統性と競技性の折衷―，渡辺一郎教授退官記念会編：日本武道学研究，同会，1988，所収，354頁
- 34) 前掲書4，248 - 250頁
- 35) 藤吉齊：大石神影流を語る，自刊，1963，8 - 10頁
- 36) 水野邸に於ける大石進。光行照太・藤丸満編：柳川史話，柳川郷土史刊行会，1957，86頁，より
- 37) 前掲書31，15 - 16頁
- 38) 「大石武楽ノ事歴」。福岡縣篤行奇特者事蹟類纂（1896発行），国書刊行会，復刻版（1983），所収，633頁
- 39) 堀正平：大日本剣道史，剣道書刊行会，1934，150 - 151頁

（ながお・すすむ 商学部教授）